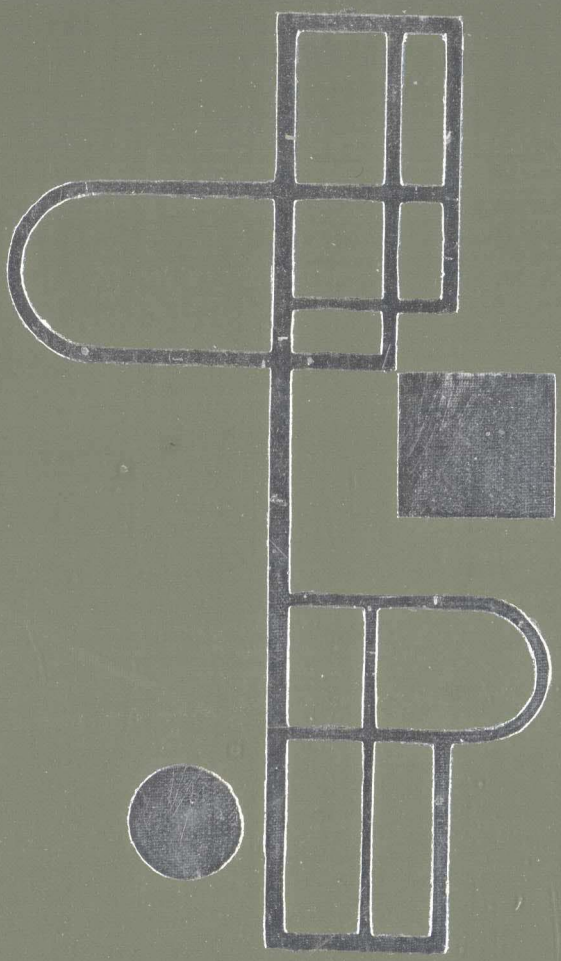
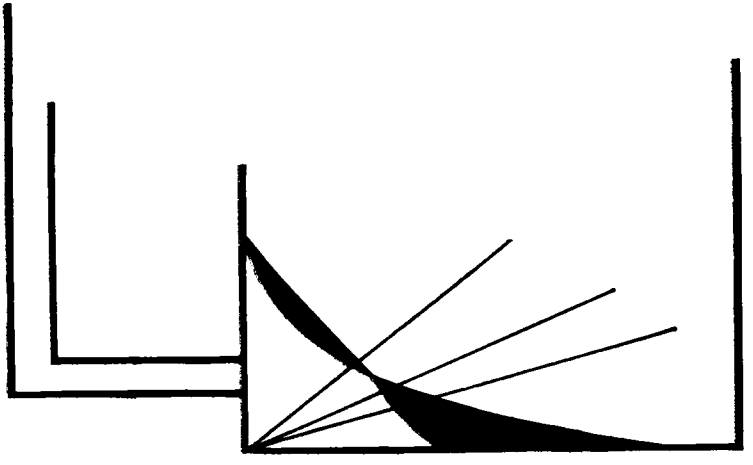


夫雄夫一
一道武周
邊山原藤
渡竹桑加

集

新選 現代日本文學全集

34



筑摩書房版

新選 現代日本文學全集 34

渡辺一夫
竹山道雄
桑原武夫
加藤周一 集

昭和三十四年九月十五日 発行

著者
渡辺一夫
竹山道雄
桑原武夫
加藤周一

東京都千代田区神田小川町二ノ八
発行者 古田晁

東京都青梅市根ケ布三八五
印刷者 山田一雄

東京都千代田区神田小川町二ノ八
発行所 筑摩書房
〔電話〕東京二九局(29)七六五一(代表)
振替 東京一六五七六八

整版 株式会社精興社
印刷 株式会社精興社
製本 和田製本工業株式会社

渡辺一夫集　目次

エラスミスムについて……七
フランスの百科辞典について……一四
「うなぎ」の俚言……二九
フランス古書版画のことなど……三〇
Geoffroy・Toryのこと……三三
凍つた言葉の伝説……三四
架空文庫について……三七
モンテーニュと人喰人……四〇
宿命について……四五
平田篤胤の「大和魂」について……四八
乱世逸民問答……五一
架空遯逅記……五六
ガーター勲章について……六一
僕の手帖（抄）……六六
人間が機械になることは避けられないものであろうか？……八七
文法学者も戦争を呪詛し得ることについて……九四
僕の語学修業……九九

竹山道雄集　目次

失われた青春……一〇七
樅の木と薔薇……一二八
国籍……一三八
幻影……一三六

門を入らない人々……一四七
夢殿観音……一六二
昭和の精神史（抄）……一六九
蓮池のほとりにて……一七九

桑原武夫集　目次

ジッドの死をきいて……二〇五
アラン……二〇九
谷崎氏のインエイ・ライサン……二一一
君山先生……二一三
鷗外と不俗……二一九
南方熊楠の学風……二三三
河上肇『自叙伝』……二三〇
ニアリング夫妻との一夕……二三八
『大菩薩峠』……二四一
デダルスの翼……一八二
磯……一八七
砂の上にて……一九二
ベナレスのあたり……一九八
西堀南極越冬隊長……二四三
漢文必修などと……二五〇
みんなの日本語……二五七
平和についての架空座談会……二六二
平和運動と誓い……二六七
日本文化論のあり方……二七二
明治の再評価……二七七
考史遊記……二七九
しろうと農村見学……二八四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

加藤周一集　目次

高原の幸福……三〇一
金槐集に就いて……三〇九
日本の庭……三一一
ポール・クローデルを繞つて……三一三
文学とは何であるか……三一七
日本文化の雑種性……三二五
雑種的日本文化の希望……三三四
仮托の名手、渡辺一夫……中島健蔵　四〇四
竹山道雄氏について……高見　順　四〇七
桑原武夫論……多田道太郎　四一〇
自己解説……三〇二
近代日本の文明史的位置……三六〇
果して「断絶」はあるか……三七二
風向きの変化と日本の現実主義……三八二
美術史の縮図……三九二
肖像画について……三九八
加藤周一における西洋と日本……原田義人　四一三
解説……河盛好蔵　四一六

装幀　恩地孝四郎
　　恩地邦郎

渡邊一夫集

エラスミスムについて

サチュロスの仮面を取ってくれ、
この重大な時代が素顔を求めているのだ。
――マイエル『エラスムス』――

エラスミスム Erasmisme という語は、ルネサンス期のユマニストとして、ユマニストの王者だとかヨーロッパの良心だとか呼ばれたデジデリウス・エラスムス Desiderius Erasmus 1466 10/28―1536 7/12 の精神的態度一般をさす為に、屡々用いられる。

○

エラスムスの四百年忌に当る祭典が、一九三六年にヨーロッパ各地で催されたが、この絶対平和の使徒の死を思い出すのに極めてふさわしいとも言える暗い雲の動きが既に世界に見られ始めた頃だつた。今、簡単な歴史年表を開けてみるだけで、宿命の重い不吉な足音が近づきつつあつたことが直ちに感ぜられるであろう。少くとも筆者にとつては、正に胸ふたがるような思いを以てしか回想できない悲劇の序幕時代であつた。この時行われたエラスムスの四百年祭と前後して、フランスでも多くの論説や著書がエラスムス或はエラスミスムを繞つて公表上梓された。そして、一九三五年に仏訳されたステファン・ツワイクの『エラスムス』(ベルナール・グラッセ刊)にしても、一九三六年に上梓された精到なゴーチエ・ヴィニャルの『エラスムス研究』(ベイヨ刊)にしても、一九三七年に発表されたジョルジュ・デュアメルの『二人の師匠』(ポール・ハルトマン刊)中の「エラスムス論」にしても、当時のフランス知識人の深い憂悩と祈願とを現していたように思われた。

勿論、エラスムス或はエラスミスム讃美だけが月並に行われたのではなく、厳しいエラスムス或はエラスミスム批判も行われたのは当然と言わねばならない。今なお僕が保存している若干の資料のなかでは、一九三六年十一月二十八日の『ヌッヴェル・リテレール』紙上に掲げられたジオヴァンニ・パピーニ Giovanni Papini の『エラスムスの痴愚』と、当時『ラシーヌ論』で「批評賞」を獲得した新進批評家チエリー・モーニエ Thierry Maulnier が一九三五年五月十一日に同じ紙上に発表した『エラスムスの賢明さ』とが、エラスムス批判として色々な問題を含んでいたように思う。そして、第二次大戦後の現在でも、エラスムスは批判され得るし、彼にまつわる諸課題は依然として解決され尽していないように思う。私は、真正面からエラスムスやエラスミスムを現在の問題として論ずる資格も持たないし、様々な課題を詳しく論考してこれに解決を与える能力も持つていない。不幸にして私はエラスムス及びその時代の複雑な事実についても、また現在の深刻な事態についても極めて不完全な知識しか持ち合わせないからである。ただパピーニなりモーニエなりの所説に散見する課題を二三拾いあげて、管見を述べ、責をふさぐことしかできないのである。

○

パピーニは、その『エラスムスの痴愚』という標題で示す通り、エラスムスの『痴愚神礼讃』Laus stultitiae (Encomium moriae) を中心にしてその論旨を展開している。先ずパピーニによつて、この辛辣な作品の否定面が強く取りあげられる。そして、パピーニによれば、矛盾や欠陥を自らに蔵しながらも進行してゆく筈の生命の否定が、エラスムスの合理主義的すぎる諷刺批判によつて行われているのであり、生命の否定である以上、エラスムスは石胎のアタラクシヤ(平安)の擁護を試みているのだということになる。……熱烈な創造的な面を持つた生命の脈動が不合理な喜劇だというのならば、真の叡智は墓穴のなかにしかあるまい? エラスムスは、永遠の不在者であり、熱情の永遠の敵であり、創造し、信仰し、焼棄し、格闘し、苦悩し、死の覚悟を怠らぬ者を狂人と呼ぶのであ

り、偉大なるものにあこがれ、歴史を作るあらゆる人々を狂人と名づけるのである、とパピーニは極言する。「もし哲理を究めることが、プラトンの言う通り、死んでいること乃至死ぬことであるならば、エラスムスは哲人だろう。だが、それは生きた真の人間ではない。キリスト教徒でもない」と。そして、パピーニによれば、真の賢人は己の智慧を疑うものだし、聖人になるくらいの人間は己を罪障深い人間と考えるものだが、エラスムスは、他人の痴愚を探し出して、それを嘲笑するだけで、しかも己だけが聡明で狂乱していないという態度を示す以上、そのことそれ自身が、エラスムスの痴愚の証拠となろうというのである。そして、パピーニの結論は、次の通りである。

「ロッテルダムのエラスムスは、臆病な偏執狂である。同胞の痴愚を指摘して有卦に入つた結果、彼は自分の痴愚を暴露し、これを重態ならしめた」と。

○

エラスムスの『痴愚神礼讃』（一五〇九年）は、エラスムスの作品としては、恐らくさほど重要なものではないかもしれぬのに、一番重要な声名を持つようになつたのは、この著作が諷刺作品として同種のものを凌駕するほどの出来栄えであつたことによるのは勿論であろうが、更にまた、この作品がヨーロッパの宗教改革運動を背景として持つにいたつた点によるのであろう。法王や修道僧や教会の悪弊に対する嘲罵は中世伝来の文学的主題であつたが、それが宗教思想闘争や啓蒙の武器にまでなりあがつたのは、エラスムスのこの著作によつてと申してもよいかもしれない。博学な古典学者でカトリック司祭たるエラスムスのこの改革的な態度を見て、宗教改革派は、有力な味方の出現として、これに拍手を送つた。そして、この拍手に答えるかのように、『痴愚神礼讃』の仏訳（一五一一年）は、エラスムスの死後一五四二年一月二十七日、フランス・パリのソルボンヌ神学部によつて不敬瀆聖の書として禁書にされてしまうのである。当時のソルボンヌ神学部は、カトリック教会の探題であり検非違使であることを思えば、これは一つの価値評価にもなろう。新教派よりの拍手は正に本物だつたのである。そして、エラスムスは、この著作の宿命について責任を取らねばならず、その為に生涯は費された。後年エラスムスは、自らに拍手を送つた新教徒たちから態度闡明を強要される。そして、二つの教会が各々現世権力と野合していた時代であり、異端はいずれの側からも抹殺される運命にある以上、カトリック教徒としてカトリック教会の粛正を要望していたエラスムスは、ルッターと論戦し、自らのカトリック教徒としての立場を明示せねばならなかつたのである。

「公教会は私にとつて極めて重大なものであるから、もし公教会がアリウス主義やペラギウス主義を採用したら、私も教会とともにそれらを採用するだろう。」（ゴーチェ・ヴィニャル『エラスムス研究』第二七〇頁）

こう言つたエラスムスの真の考えは多くの註釈者によつて様々に論ぜられるとしても、ルッターの挑戦を受けた場合にエラスムスの筆によつて記された文章は、少くとも、明らかな態度表白になる。

しかし、エラスムスは、「福音」を歪曲する人間の非は咎めねばならず、その為には決して平安をむさぼつてはいなかつた。第一に『痴愚神礼讃』がその雄弁な証拠となるであろう。たとえ中世伝来の文学的主題であろうとも、この場合には、鋭い武器として用いられる。エラスムスは、明らかにカトリック教の制度や僧侶の悪弊を批判し諷刺した。そして、これは、新教徒側にとつて、ルッターにとつても、エラスムスをシンパと見る理由を十分に提供するのである。しかしながら、「わが地に平和を投ぜん為に来れりと思うな。平和にあらず、反つて剣を投ぜん為に来れり」というマタイ伝（一〇ノ三四）中のキリストの言葉を宗教革新運動の標語にとりあげ、階級闘争的な性格を十分に有する新教運動の勝利の為に用いようとしたルッターの「神の兵士としてのキリスト教徒」の概念は、エラスムスから見れば、これまた自らの信ずる「福音」を歪曲するものであつた。従つて、新教徒には理解ありげに見えても、その為に投票はなし得ず、「曖昧主義の王様」と罵られ、卑怯者と嘲られるのである。エラスムスは、宗教

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

改革の理由は十分に認めていた。しかし、改革はあくまでもカトリック教会内で行われるべきであつたのであり、同じキリストの名によつて、同胞が迫害し合い、殺戮し合うことは、「福音」に悖ると考えざるを得ないのである。

「彼らも絶えず叫ぶ、福音、福音と。しかし、彼らは自分たちだけが唯一の註釈者たろうとする。福音が野蛮な人間を穏かにし、悪行をなすものを教化し、好戦的な者を平和的にし、神を瀆す者を信者にした時代があつた。ところが、今日では、福音を盾にとる人々が、物の怪に憑かれた人間のように、あらゆる種類の争乱を蒔きちらし、善人を罵つている。確かに、新しい偽善者、新しい暴君の姿が見られるのであつて、ごく僅かな福音礼讃のきらめきすらも見られない」とエラスムスは明言するのである。（ツワイク『エラスムス』第一七七頁）

エラスムスは、『痴愚神礼讃』で主張していることは、キリストの福音を歪曲するものの排除であり、真の福音の探求と実践とであつた。かるが故に福音を歪曲していたカトリック教内の姑息怠惰な修道僧や神学者は狼狽し、エラスムスの清新穏当な考えを危険視した。そして、ルッター派はエラスムスを自らの陣営に引きこもうとした。しかし、二つの異つた人間観や世界観が生きた人間の肉体に宿る時、そして、一ぽうを宿した肉体が他ほうを宿した肉体を屈伏せしめ、屈伏せぬ限りはその生命をも脅そうとする時、そして、この対抗を現世の権力が操る時、思想交流交番という人間のみに与えられた高貴な真理究明の協同作業は、戦乱・殺人・拷問・暗殺の形でしか現れざるを得なかつた。このみじめな人間的条件への反省と、その浄化解決とを希うことが福音の一つと信じていたエラスムスは、新旧両派の血みどろな衝突をあくまでも否定し、いずれかの側に助力を与えれば自らの否定する闘争を肯定することになると考えた以上、いずれにも屈さず、その態度は曖昧であり、Solus esse volui.（私は一人でいたい）と自らも言い、他人からは、Erasmus est homo pro se（エラスムスは加らずに、一人切りでいる）と半ば揶揄的な評言さえ与えられるのである。

パピーニが咎める「石胎の平安」が、はたしてエラスムスにあつたろうか？　この「平安」が熱い念願で貫かれていても「石胎」か？　エラスムスは、血の流れるのを阻止する為に、果し合いをしている人々のいずれかを殺せるものであろうか？　彼の信ずる「福音」を理解させる為に、反抗する人々、頑固な人々を根絶やしにできるものであろうか？　そして、夢中になつて斬り合いをしている人々を戒め、その行為を中止させる為に有効な方法は、傍にいて、こうした行動が愚劣であることを語り続け、聞く耳あらば聞けと願い、再び同じ愚挙が再現せぬように叫び続ける以外に何があろうか？　自らも剣を握つて戦う二人の間に這入れというのか？　エラスムスは剣を握るのがいやなのである。剣は人間を斬り得るからである。「石胎の平安！」パピーニは何をさしているのであろうか？　エラスムスには外見上の「平安」しかなかつたし、この「平安」からは、なるほど殺戮や暴行や軽信は生れてこない。

パピーニはまた、エラスムスを目して、生命あるものを狂気と呼ぶ狂人としているし、自分だけが賢いと自惚れている狂人だとしている。ここで、パピーニの文章をなるべく忠実に訳して引用しなければならない。「もし、燃えあがるような、創造的なところのある生命が不合理な喜劇であるならば……」

エラスムスは、生命を全面的に否定などしていない。しかし、生命の妄動、肉体の犯す過度を戒め、諷刺しているだけである。

更にパピーニは記す。

「情熱の永遠の敵であるエラスムスは、創造し、信仰し、焼きつくす人々、戦おう、苦しもう、死のうと用意しているすべての人々、偉大なるものにあこがれ、歴史を作るすべての人々をば、狂人と呼ぶ。」

この壮大な形容詞は、何を頭に描きつつパピーニによつて記されたのであろうか？　一九一五年に既にカトリック教へ帰依した彼は、まさかルッターを念頭に置く筈はなかろう。しかし、エラスムスが狂乱と呼んだものは、理性の力を指南車とせぬ盲目的な情念や生命感である以上、大形ながらこれらのパピーニの形容は当つているかもしれない。「歴史を作る人間」この傲岸な概念に弄ばれて妄動する人間、これは確かに

エラスムスに嘲られ戒められたろう。更にまた、「偉大なものへあこがれる」ことが、殺人行為と同義語になることも、エラスムスは我慢できなかつたであろう。

「人間の魂や人間の行為のなかにある度を越えたもの、あふれ出るようなもの、神秘的なもの、あおり立てるようなものが、エラスムスによつて、痴愚として嘲弄されるのである。」

このパピーニの言葉は、実に正しい。というのはエラスムスは、人間の精神や行動が理性によつて常に監視されねば、最も哀れな生命主義や非合理主義に陥り、「福音」に悖ることはもとより、人間社会の混乱、倫理の錯乱を来たすと考えていたからである。そして、こうしたパピーニの生命礼讃は、カトリック教徒たるパピーニをしてルッターに赴かしめなかつたとしたら、どこへ追いやるのであろうか？　我々は、パピーニが一時ではあるかもしれぬが、ファッシスムの支持者となつたことを知つている。

エラスムスは、「臆病な偏執狂」でもないし、他人の狂気を示しつつ自らの狂気を暴露もしていない。またエラスムスは、自分だけが賢いとも思つていない。同じキリストの名によつて殺戮する行為を否定して、これに加わるを肯ぜず、和平の要を説き続けるのが何で「臆病な偏執狂」か？　他人の狂乱を指摘するのが、痴愚の証拠か？　また戦乱の為に追い立てられ流浪の身となり、同志の人々が続々と暴力に倒れる報を受けて暗い晩年を送るにいたつたのが賢い人間だということになるのか？　ただ、エラスムスに終始感ぜられる一つの悲しいことは、それは、エラスムスの態度、エラスミスムは、争闘を絶対に否定するが故に、人間的条件への反省や浄化を希わぬ現実にあつては、常に孤独であり無力であるということである。少くとも、現実が、人生が、太古の昔と変りなく、争闘によつてしか進行しないという信念を人が護持する限りは、また、同じ人類でありながら、同じ正義と幸福とを求めながら、理解や譲歩や協力や自己改革を拒否して、ただ非情な物理法則が一切の対立の唯一の解決の道であり、人間の理性は常に妄想であると考えている限りは、エラスミスムは孤独であり無力であろう。しかし、エラスムスの死後人間の歴史のなかには、モンテーニュ、スピノーザ、ディドロ、ヴォルテール、レッシング、シルラー、カント、トルストイ、ガンジー、ロマン・ロランという偉大な名前が残されて居り、それらがエラスミスムと無縁ではないということを、我々は知つている以上、エラスミスムの与える悲しみが今直ちに絶望に変るテンポはややゆるめられるという幻想が、今なお残されていると希望したい。

○

一九三五年五月十一日の『ヌゥヴェル・リテレール』紙に掲げられたチエリー・モーニエのエラスムス批判の要旨は左の通りである。

エラスムスが寛容の精神を説いたのはよいとしても、もつと積極的になぜやらなかつたのであろうか？　勇気がないと言つて咎められると、エラスムスは、自分はお備い兵ではないと答える。ある党派的な立場に引きこまれそうになると、彼は必ず逃げてしまう。ユマニスト・エラスムスは、自分の思想の勝利よりも、世界の平安、自己の静穏を好んだのにすぎない。真理を信ずる者は真理の為に戦え、たとえこの闘争で世界が破滅しようとも、ルッターが叫んだ時、精神の真の特権をエラスムスに対して正にルッターが護つたのであつた。エラスムスは、精神の勝利を求めずに精神の避難所を求めたのだ。弟子にも当る新教徒詩人ウルリッヒ・フォン・フッテンが迫害されて、病魔に冒された身をバーゼルのエラスムスの門に寄せた時、エラスムスは、責任と病菌とを恐れて、固く門扉を閉じたままだつた。フッテンは、流浪の身のまま師を呪いつつ死んだ。これがユマニスムの実体ならば一体何だろう。このようなユマニスムで、我々は十分であろうか？

チエリー・モーニエは、当時、刻々と迫つてくる非人間思想の擡頭に対処する為に、「戦闘的ユマニスム」を主唱したのであつて、これはパピーニとは全く異る意図から発する批評を行つているものと考える。そしてエラスムスの、またエラスミスムの悲しさを暴露していることは認めねばならぬ。しかし、エラスムスの場合、一つの党派に引きこまれることを、言を左右にして回避したのは、その党派が、現にお互いに血

を流し合い、お互いに「福音」を叫びつつ、最も「福音」を忘れていたからである。エラスムスの卑怯な態度は、追いつめられた結果に外ならぬ。エラスムスは、自分の思想の勝利を願つたが、それは世界の平安そのものに外ならず、その結果として、己の静穏をも同じく求めたのだろう。彼が利己的な平安をのみ求めたように見えるのは、これまた追いつめられた結果にすぎず、その内心の懊悩は、決してとるに足らぬものではなかつた。またエラスムスの信ずる真理は、世界を破滅させない為にこそあつたのであり、一切の現世的暴力闘争の否定であつたから、自己の真理の勝利の為に敵を打倒すること、即ち、敵の肉体を抹殺することは、エラスムスとしてはなし能わなかつた。しかし、エラスムスは、己の信念を匿してはいない。主張はしている。『痴愚神礼讃』から『自由意志論』にいたるまで、彼の主張は表明されている。彼としては、それ以外の道はないわけであり、この道については少くとも、エラスムスに懈怠はない。

また一体チエリー・モーニエがルッターによつて守られたと言う「精神の真の特権」とは何であろうか？　動脈硬化に陥つた当時のカトリック教会とその神学者とに対する批判と粛正の実践とは、旧教側の攻勢にも拘らず、ルッターによつてなされ続けたのであり、チエリー・モーニエは、一九三五年頃擡頭するナチスムやファッシスムの攻勢に対しての批判と人間性合理性の擁護とに、ルッターを結びつけて考えていたのであろう。しかし、「精神の真の特権」とは、ルッターの専売ではない。それのみか、同じ神の名によつて殺戮し合い、同じ正義の名の下で果し合いをする人間に対して、この殺戮もこの果し合いも愚劣であり、非人間的であり、それの解決は他に求めねばならぬと説くこと、またそうした考えを抱き通すことこそ、人間でなくてはなし能わぬことであるが故に、正に「精神の真の特権」とは言えないだろうか？

またエラスムス、そのエラスミスムは、常に追いつめられ、避難所へ引きこもらざるを得なかつたのであろう。そして、後世の我々はこの卑怯な行為、女々しいやり方に対して、言いようもない焦慮とともに一種の諦観を抱くのである。エラスミスムはエラスムスが闘争で倒れ、殉教したら、宿るべき肉体を喪うのである。束の間でもエラスミスムを地上に存在させる為には、エラスムスは生きていなければならなかつた。ユマニスト・エラスムスにとつて政治は倫理でなければならず、これは当時の現実政治とは甚しく遊離した理念であつた。しかも、ルッターの主張を前面に立てて動いていたものも、これに対抗する勢力の底にあつたものも、現実の政治以外の何物でもなかつた。エラスムスの政治思想も、その福音思想も即ちエラスミスムは、所詮、当時の人間の肉体に宿る為には、多くの障碍妨害を条件とせねばならなかつた。なお且つエラスムスの肉体はこれを宿した。エラスムスは行動できぬのである。ただ思考し、語り、存在する以外に道はないのである。

ここに極めて逆説的なアフォリスムを記し得る。エラスムスは、あまりに人間的すぎる思想をその肉体に宿した為に、その行為は非人間的になつた、と。ここにも人間的条件はあるのであり、それを意識せざるを得ぬエラスムスの苦悩は、決して僅少なものではない筈である。

エラスムスの生涯中最も暗い日のように考えられるのは、チエリー・モーニエによつても、また多くの評論家によつても同じく示されている通り、ウルリッヒ・フォン・フッテン Ulrich von Hutten 1488 4/21—1523 8/29 拒否の日である。事情も理由も異ろうが、ジャン・カルヴァンにとつて、同宗のミゲル・セルベトをジュネーヴで処刑した日が、生涯中の最も暗い日であつたと言われるのに対比せしめ得るかもしれない。

エラスムスを尊敬し、先輩の同志の如く考えたフッテンは、凡そエラスムスとは正反対な性格の持主であつた。すぐれたユマニストではありながら、激越な新教派闘士であり、愛国運動者であり、放蕩三昧に耽つたフッテンは、迫害の為に、またその軽挙盲動の結果不義理を犯したりした為に、浪々の身をバーゼルに運んだが、その時には、不身持の報いである梅毒症状も悪化していた。一五二二年の十二月のことである。その頃のエラスムスは、新旧両派からの出馬懇請に板ばさみとなり、全く動けなくなつていたし、バーゼルの町のカトリック派の監視の眼は

厳しかつた。エラスムスは、その人間的な思想を守り通す為に、この場合も極めて非人間的な態度に追いこまれてしまうのである。エラスムスは固く門扉を閉じて、昔の弟子を入れなかつた。フッテンは憤然としてバーゼルを去り、チューリッヒに暫く滞在したが、一五二三年の夏の初めには、ストラスブルグで『エラスムスを問責す』Expostulatio cum Erasmo という小冊子を発刊した。そして、エラスムスは、初めはルッターと同じ志を持つていたのに、ルッターの声望が増したので、これを妬んで、卑怯にも裏切るにいたつたと罵倒した。エラスムスも流石に激怒して、チューリッヒ市当局にフッテン追放を要求し、その結果フッテンはウーフェナウの島に渡り、そこで死ぬのである。

フッテンの罵倒に対してエラスムスは、『フッテンのはねあげた泥水を拭う為の海綿』Spongia adversus aspergines Hutteni という反駁をしたため、フッテンの非難に一つ一つ答え、自分はルッター派でないし、それのみか、この自分の態度は皆に見習われてほしいし、自分はいかなる党派にも属さぬ、と宣言するにいたつた。この返答は、フッテンの死後上梓された為、フッテンの眼には触れなかつたが、ルッター派の陣営には大きな衝撃を与えるものだつた。エラスムスは、いずれの党派にも属さぬと言いながら、特に、ルッター派でないことを強調したからである。ルッター派からの攻撃は日ましに激しくなり、遂に、『自由意志論』によつてエラスムスはルッターと正面衝突をするにいたるのである（一五二三年―一五二七年）。このエラスムスの行動も追いつめられた行動である。結果は、エラスムスの沈黙で有耶無耶にはなつたが、宗教改革とユマニスムとの決裂という重大な現象が生れ、その余波は各地にも及ぶのである。

フッテンを拒否した日は、正にエラスムスの生涯中最も暗い日だつたのだ。彼の行為は、明らかに「福音」の慈悲の教えに背くものと言える。これには、何とも抗弁のしようがない。救いを求める重病の、不幸な、昔の弟子を見殺しにしたのである。たとえフッテンがいかに軽挙盲動する人間であるとしても、エラスムスは、「福音」を守ろうとして「福音」に背いてしまい、人間的たらんとして非人間になるのである。エラスムスも脆弱な人間である。追いつめられて犯したこの種の非人間的行為は、重大なウォルムスやアウグスブルグの会議への欠席と同様に咎められてもいたし方ない。しかし、人間エラスムスが、利己的な平安しか求めないと批判されるのを覚悟の上で、追いつめられた肉体になおも宿し続けたものはあつたのである。我々は、それをも咎めるわけにはゆくまい。我々は、エラスムスを咎めることで物足りなかつたら、エラスムスにこの醜態を強いた現実をも咎めなければならないのである。

チエリー・モーニエは、エラスムスのこのような醜態を含むエラスムス的ユマニスムでは不足だと言う。しかし、彼にしても、エラスムスのあの非人情を咎めても、エラスミスムまで否定する気持はないだろう。チエリー・モーニエの小論が書かれた頃の重大な関心は、恐らく、ヴェルサイユ条約をナチが破棄したことから始まる世の動きに向けられてはいなかつたか？そして、チエリー・モーニエにしても、エラスムスに於いて追いつめられたもの、エラスミスムの解放と確立とを強く求めていたのであろう。「平和とは、潜在的な力が黙々として邪悪なものに対して収める持続した勝利」の謂であるとヴァレリーは言う。エラスムスの場合、狂信的なカトリック派の監視と、とかく粗暴に流れ易いフッテンと、事あれかしと待つていたルッター派とに囲まれて、動けなくなつた結果があの醜態であり、そして、追いつめられたこの行動そのものが、反ルッター派的宣言となつた。エラスムスは二重の醜態を演じているとも言えよう。しかし、エラスミスムはその為に咎められてはならない。エラスミスムが黙々として持続した勝利を収められなくなつた時に、エラスミスムは無力となり、これを肉体に宿した人々は追いつめられるのであり、その結果、狂信と暴力とが荒れ狂うのである。エラスミスムは、一人でも多くの人々によつて護り続けられねばならぬものであり、しかも争闘の武器ではない。ユマニスムの徒が追いつめられて銃を取ることは、ユマニストの王者エラスムスが非人情な醜態を犯すことと併行する悲劇である。これらの

悲劇を回避する為に努力するのがユマニスムの使命であり、エラスミスムの目的であろう。一九三五年に、チエリー・モーニエが、エラスムスのユマニスムを非難した時、既に大きな悲劇は始まつていたのである。

そして、この大きな悲劇がようやく一段落ついた現在、エラスミスムの獲得は、何よりも先になされねばならぬ人類的な責務にすらなつたように見える。極めて強力な兵器が、対立する集団によつて用いられ、しかもその争闘が、一二の部落や一二の国の間に止まらずに、人類全体を狂信のなかに叩きこむ危険があり得る以上、エラスミスムを今こそ守り育てぬ限り、人類の荒廃絶滅に近い状態によつてしか新しい悲劇は閉じられまい。

○

エラスムスの晩年には、ヨーロッパ各地で血まみれな宗教戦乱、苛酷な宗教抗争が始まり、刻々と拡大して行つた。エラスムスの最も恐れた不寛容が、常に「歴史を作つて」行つた。カトリック派もルッター派もカルヴァン派も、各各火刑台を用意し、キリストの名・正義の名によつて殺戮することを常習とするにいたつていた。そして、エラスムスは殆ど忘れられて、死んで行くのである。彼の弟子であり、フランスに於ける彼の翻訳者であるルゥイ・ド・ベルカンも、イギリスに於ける同志ジョーン・フィッシャーもトーマス・モーワも、理不尽な暴力と不寛容の犠牲になつて、既に刑死していた。暗澹たる晩年である。

しかし、エラスムスがこの地上で孤独な生を送つた約六十年の歳月と、彼の残した著作とは全然無意味ではなかつた。既に、死ぬ約四年前には、一五三二年十一月三十日附の書簡が一通、フランスから届けられていた。それは当時リョンにいた若き日のフランソワ・ラブレーからのものであり、「余の一切を師に負う」という告白を秘めていた。

更にエラスムスが死ぬ三年前に生れたミシェル・ド・モンテーニュは、エラスムスが恐らく予想した以上に残忍な宗教戦乱のまつただなかで、次のような言葉を残しているのである。

「現在この国の混乱渦中にあつて、いくら私に利害関係があるからと言つても、私の敵に具つている美質を認めないわけにはゆかなかつたし、私の組する人々のうちに咎むべき欠点を認めないわけにもゆかなかつた。」（『エッセー』三ノ一〇）

「我々の信念や判断が真理に仕えずに、我々の欲望の企図するところに仕えるようにせよと人人は望む。むしろ自分の欲望とは全く反対な逆な極端に走つて間違いを犯すかもしれない。それほどに私は、自分の欲望に駆使されるのが恐ろしい。更にまた、自分が願い求めることを、私はやや敏感に警戒するのだ。」（同上）

エラスミスムは、一人でも多くの人々で護られ育てられねばならない。さもなくば我々には虚無しか残されていないであろう。エラスミスムに限界があるとも批評される。それは複雑な現実を処理する為には、エラスミスムではどうにもならぬところがあるということであるらしい。しかし、エラスミスムで処理できたらどのくらいよいか判らぬということを皆が判るべきであるし、処理すべき現実の存在が虚無に帰する危険がある時、これを救うものはエラスミスムしかない。エラスミスムの限界の指摘が、破壊や暴力や狂信に赴く現実処理法の口実となつてはならぬのである。

（昭和二十三年一月執筆）

（附記）エラスムスとフッテンとに関しては、本書収録の『僕の手帖』（抄）のVをも参照していただけたら幸いである。

（昭和三十四年七月記）

フランスの百科辞典について

一　序言

フランスの百科辞典の略史を、という御註文であるが、私はこうした方面のことを今まで特に調べたこともないから、以下に記すことは、全くの我流の素人的略史になろう。即ち、私の無智の為或は不注意の為に、見落している著述も沢山あるに相違ないし、私の史観や文化観の不備から、笑うべき誤謬を犯している場合もあるに違いない。ただ大方の御教示を仰いで、今後機会があつたら本拙文の欠陥を埋めてゆくようにしたいと思つているだけである。もし拙稿が、他日有為な人々によつて書かれるべき綿密正確な「フランス百科辞典史」の為の材料もとなり得ば、過分の光栄を与えられたものと言わねばなるまい。

A　百科辞典とは、アンシクロペディー Encyclopédie の和訳であり、ギリシャ語の原義は、「輪のなかに入れられた教育・知識」であろう。「輪のなか」というのは、結局ひとまとめにしたという意味ではあるまいかと思つている。要するに、人生百般の事象に関して人間が獲得した知識を或る段階（時代）毎に集大成した著述の義なのであろう。フランス語で「アンシクロペディー」という語を初めて用いたのは、十六世紀の物語作家であり、ユマニストであつたフランソワ・ラブレー François Rabelais (1494 ?—1553 ?) である。（『第二之書パンタグリュエル物語』第二十章を参照）従つて、ギリシャ語から生れたアンシクロペディーという語が、フランス語となつたのは、凡そ一五三二年ということになる。

しかし、アンシクロペディーという語がフランス語としてまだなかつた時代でも、何かの理由で百科辞典的著述を作ろうとした人々、またこうした文化的に貴重な著述の出現を要求していた人々はいたわけであるから、明らかにアンシクロペディーとは銘打たれぬものではありながら、また、近代のアンシクロペディーに比べれば甚だ簡単なものではあつたにしても、中世から既に、百科辞典と言つてもよい作品はフランスにあつたようである。これらの所謂原始的揺籃期的作品については、材料が不備な私は、果して正確な記述ができるかどうか甚だ不安であるが、順序として本略史中に於いても当然触れなければならぬものであろう。（因に記すがアンシクロペディーという標題を一番最初に用いたのは、一五五五年にバーゼルから上梓されたP・スカリック P. Scalich の『万有百科辞典』Encyclopoedia seu Orbis disciplinarum だそうである。）

B　アンシクロペディーという語と並んでディクショネール Dictionnaire という類義語もあるし、レクシーク Lexique という語などもある。しかし、純粋に語学的な目的によつて編まれた辞典——その多くが Dictionnaire なり Lexique なりと呼ばれるのを常とするが、——は、今の場合除外しなければならない。尤も、アンシクロペディーという語がフランス語として存在しなかつた時代には、内容は当然百科辞典でありながら、ディクショネールを初めとしてその他様々な名称で呼ばれていた著述もあつたから、単にディクショネールという題だからと言つて語学専門のものとのみ考えて無視し去るわけにもゆかない。現代では、人事百般のことに関する辞典は、アンシクロペディーともディクショネールとも呼ばれているし、編者もこうした名を採用はしているが、範囲がやや限られた場合、例えば、科学・宗教・哲学……などに関する個々の辞典は、アンシクロペディーよりもディクショネールと呼ばれているようである。従つて、以下の記述に於いて、論及される百科辞典が必ずしも常にアンシクロペディーという標題を持つていないこともやむを得ないのである。

C　更にまた、語学に関する辞典は除外すると記したが、言語と観念乃至思想との関係に多少なりと紋切型ではない考え方をする人々ならば、言語だけの辞典という考え方にも疑問を持

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com